

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

合理的なものとは非合理的なものとの間で

木村章男

合理的なものとは非合理的なものの中にあり続けること、それが文学的であるということである。文学とはその間にあることの言語表現である。では言語とは合理的なものか、あるいは非合理的なものか。言語学はあくまで言語を合理的なものとは前提するだろう。文学の研究も言語学の一つではあるが、文学の研究においては、文学の言語はやはり合理的なものとは非合理的なものとの間にあるものとして、そのままに研究されている。つまり、文学の研究においては文学という言語が「学」の対象からはみ出していることが、半ば前提されていると言える。

私たちは多くの詩人や小説家が明らかに宗教的であり、またそれ以上に多くの詩人や小説家が宗教に対してどっちつかずの、誘惑と抵抗の間にあるようなきわどい関係をとってきたことを知っている。現代の日本文学の有名どころでは、宮沢賢治は仏教徒として『法華経』を信奉し、遠藤周作はカトリックのクリスチャンだったが、それほど明らかでなくても、芥川や太宰はキリスト教のある思想に共感を抱いていたし、三島は日本ロマン派的な宗教家であり、大江は反発しながらもキリスト教と微妙な関係を保っている。

アメリカの小説家や詩人で、肯定的にせよ否定的にせよ、キリスト教と全く関わりのない者はまずいないと言って良い。詩人 Elizabeth Bishop はみずからを宗教的ではないと言い “The Unbeliever” と題する詩を書いたが、これが彼女の不信の表明かと言うと案外そうでもない。この詩にはマストの上で眠る男が描かれているが、マストが十字架のことであるとすれば彼とはイエスである。だがこの詩のタイトルがこの男を不信者と呼んでいるのだとすれば、彼とは詩人の自画像でもある。詩の最後でカモメが彼の夢を代弁

する。「私は落ちてはいけない」と。だが、どこからどこへ落ちるのか。信仰から不信へか。それとも不信から信仰へか。

英米文学の基本用語の一つに *negative capability* という言葉がある。これはもともとイギリスの詩人 John Keats が手紙の中で使った言葉で、Keats はこれを「性急に事実や合理性を求めることなく、不確かさ、神秘、懐疑にとどまる能力」と定義し、これに長けていたのが Shakespeare だと言っている。よく Shakespeare には主義信条はなく思想もないと言われる。だがだからと言って、おもしろい芝居を書くためにただ徒に言葉を並べていただけというわけでもないだろう。Macbeth の冒頭で魔女が言う。“Fair is foul, and foul is fair...” 「きれいはい汚い、汚いはいきれい。」 Shakespeare はいつも中間で考えている。不信者 Bishop もまたそうである。*negative capability* とは合理性と非合理性の間にとどまる文学的な能力である。

Macbeth のことを思い出すと、いつもついでに『般若心経』の冒頭を思い出してしまう。「色即是空空即是色。」色とは人間の感覚と認識の世界のことである。これが空であるという。ここで無と言わないところが肝心である。そしてすぐに空即是色と切り返す。この後半が無ければ意味を成さない。前半だけならば空は無と読まれてしまう。つまり全ては空しいと。だから精一杯楽しんでおけと。そうやって色をどうしても肯定したいだけの凡人の理屈に利用されてしまう。色は空である。だがその空もまたあくまで人間の感覚と認識の世界で得られる知識に過ぎない。それが空即是色の意味である。これはカントの『純粹理性批判』におけるアンチノミーに似ている。無は認識不可能である。人間にとって全ては堂々巡りを繰り返す空に過ぎない。その空もまた理屈である。無からはどのような理屈も生じない。何事も肯定されず否定もされない。空の思想とはすなわち中観なのだ。

(常任委員/きむら・あきお)

研究所の研究活動状況

研究員の共同研究プロジェクト

今年度稼働中の共同研究プロジェクトは、新規3、継続3、完了3、合計で9つです。詳細は以下をご覧ください。

新規にスタートした共同研究プロジェクト

以下の3つのプロジェクトが今年度スタートしました。

- ① 泉水英計、貴志俊彦チーム
テーマ:冷戦期東アジアにおける米国の文化戦略
- ② 関口博正、照屋行雄、大田博樹チーム
テーマ:CSR 報告書研究—非財務情報の信頼性—
- ③ 金谷良夫、大橋哲チーム
テーマ:SHC における学生の英語習熟度に見るダイナミズム研究

継続している研究プロジェクト

今年度2年目を迎えるのは以下の3プロジェクトです。

- ① 石積勝、大森美紀彦、金城利光チーム
テーマ:「日本論」グランドセオリーの展開
- ② 小島大徳、榊原貞雄チーム
テーマ:21世紀における新しい企業システムの構築
- ③ 関口昌秀、鈴木そよ子チーム
テーマ:教員免許更新講習についての研究

完成年度を迎える研究プロジェクト

今年度完了するのは以下の3プロジェクトです。

- ① 後藤伸、海老澤栄一、坂井原良夫、照屋行雄、三村真人、大田博樹、李貞和、萩原富夫チーム
テーマ:P. F. ドラッカー研究
- ② 丹野勲、小島大徳、高城玲チーム
テーマ:アジアのコーポレートガバナンスと経営文化
- ③ 石積勝、常石敬一、原学チーム
テーマ:オータナティブの国際社会統治

研究所の附置センター

研究所附置の研究機関として、センターがあります。現在以下の3つの特別研究チームがセンターとして附置され、活動を続けております。

① SME 研究センター:

研究内容:中小企業(Small and Medium Enterprise: SME)の経営環境と経営革新

メンバー:田中則仁、照屋行雄、金谷良夫、石積勝、畑中邦道、田中美和

② STS 研究センター

研究内容:科学・技術・社会(Science, Technology, and Society: STS)

メンバー:常石敬一

③ 国際経営出版センター

研究内容:研究論文集の編集

メンバー:小島大徳

学校法人共同研究奨励

今年度理学部、経営学部、外部の研究員を含む6名の共同研究が採択されました。研究テーマ、メンバー構成、研究特徴は以下に示すとおりです。

テーマ:循環型社会の総合研究—有機体哲学からの支援を受けて—

メンバー:西本右子(研究代表)、一瀬益夫、海老澤栄一、小笠原強、奥邨弘司、湯川恵子

研究特徴:教育と研究との連動、文理の違いを超えた文理統合から生まれる複合科学の追究

所員学会研究活動報告 — 1

所員による学会研究事業の一環として、現在進行中の研究内容を紹介するコーナーです。

所員:海老澤栄一

学会名:日本経営診断学会

研究テーマ:経営診断学の基礎理論構築

研究方法:各支部の理論的な面でリーダーシップを発揮している会員から、ヒアリングを行う。その成果をデルファイ法で戻す。相互の意見を出し合い学習を共有しながら、次第に理論の昇華、凝縮を図る。全国6箇所の各支部訪問が6月からスタート。

研究期間:2009-2010年度の2年間

研究成果:理事会、全国大会での報告を経てブックレット作成。

太宰の大人気／西鶴の不人気

広嶋 進

今年(2009)は太宰治(1909～48)の生誕100年にあたる年で、出版物の刊行や作品の映画化が次々に行われている。新潮文庫の売り上げ歴代ランキングでは、太宰の『人間失格』は堂々の第1位で、累計615万部であるという(太宰作品は全17点で累計2040万部とのこと)。その太宰が次のような言葉を残している。

「西鶴は、世界で一ばん偉い作家である。メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ。」(『新釈諸国断』凡例、昭和20年1月)

大正・昭和前期の作家たちにとって(例えば、志賀直哉、菊池寛にとって)西鶴は崇敬と賞賛の対象であった。

井原西鶴(1642～93)の作品に関しては、これまで大きなブームが3回存在した。

1回目は明治40年代で、自然主義の作家たち(例えば田山花袋や真山青果など)が、盛んに西鶴を論じ、西鶴の翻案作品を発表した。この時は『好色一代女』や『好色五人女』等の好色物が多く取り上げられた。

2回目は昭和の初めで、プロレタリア文学が盛んな時期であった。武田麟太郎が西鶴の『世間胸算用』を翻案して短編を発表し、これに刺激されて町人物がよく読まれた。

3回目は戦後で、伏せ字が解禁され、本格的な全集や文庫本が多数刊行された。

しかし、1993年の「西鶴没後300年」の際には、記念の催し物や出版物刊行はさほどの盛り上がりを見せずに終了してしまった。その様相は昨年(2008)の「源氏千年紀」や今年の太宰生誕百年祭の盛況とは大いに

異なっていた。

かつてはもてはやされた西鶴が、なぜ近年不人気になってしまったのだろうか?

先日、ゼミ生と一緒にその理由をあれこれと考えてみた。以下はその結論である。

1. 明治から戦前にかけては「性」に関する道徳的な抑圧があったので、かえってそれが、西鶴の「好色物」に対する興味を喚起した。

2. 『日本永代蔵』や『世間胸算用』などの町人物は当時の企業経営者に対して書かれた作品だが、西鶴の対読者意識が現在の一般的な読者層(会社員や学生)と異なる。

3. 『武道伝来記』や『武家義理物語』が扱う敵討ちに対して、読者が実感を持ってない。

4. 高校古典教科書で取り上げられることが少ない。

とは言うものの、西鶴復興に関して希望の光がまったく見えないというわけではない。2004年4月に西鶴研究会のメンバー18名で、西鶴作品のアンソロジーを出版した。この書に関し、先頃「第3刷を印刷した」との知らせが届いた。タイトルは『西鶴が語る江戸のミステリー』(ペリかん社)というもので、明治期以来あまり着目されてこなかった西鶴の奇談・怪談・推理物に焦点を当てて編集したテキストである。

昨今の若い読者はリアルで悲惨な話よりも、幻想的な話、怪奇的な話の方に興味を示すようである。現代とズレているのは西鶴なのではなく、それを提供する研究者の固定観念の方なのかもしれない。

(所員／ひろしま・すすむ)

研究余滴

研究所をめぐるこれからの動き

国際交流事業活動：日韓国際経営フォーラム

- ・ 交流先大学名：韓国・東西大学校
- ・ 日程：10月21～25日までの5日間のうちのいずれか（未定）
- ・ テーマ：日韓における企業環境と政策支援（仮）
- ・ 主催：経営学部

昨年に続き、連続2回目の日韓国際交流になります。今年度は経営学部創設20周年記念事業の1つとしての役割も担っています。研究所は企画、運営などで協力します。学部学生・院生のみならず、地域市民も大勢参加します。

経営学部長会議

- ・ 日程：9月11日（金）
- ・ 主催：神奈川大学経営学部

全国にある大学の経営学部長や相当職の地位にある研究者が横浜に集まります。今年は神奈川大学の経営学部が照屋行雄学部長のもとで主催することになりました。情報や意見交換、基調講演、先進事例報告などが予定されています。研究所は企画や講演者選定などで協力します。

地域コンシェルジュ構想（案）

地域活性化を支援する活動の一環として、困っている問題をかかえている市民とその問題の解決可能なヒントやアイデアを提供できる市民との人的ネットワークの機会を作るという構想がたてられています。名づけて「タウンコンシェルジュ」。市民、学生、企業、地元商店街、会議所、市役所などの関係主体に声かけしながら、その実現の方策をこれから具体的に検討します。共生学の実践です。

経営革新講座：シンポジウム（案）

今年第5回を迎える市民や学生向けの公開講座で、基調講演、特別講演、パネルディスカッションの3部構成が予定されています。自主的な勉強会であるサロンde WINEが主催し、平塚市が後援、平塚商工会議所が共催です。研究所は、学部、大

学院と共に協催します。シンポジウムは以下の日程で開催されます。

- ・ 日程：11月7日（土）
- ・ テーマ：共利共生の仕組み（仮）

研究所からのお知らせとお願い

【お知らせ】

- ① 4月からビデオカメラ、ノートパソコン、デジカメなどの教育機器用品を暫定的に貸し出ししております。正規の貸し出し機関が決まるまでの一時的な処置です。ご利用の際、研究所にお申込みください。また消耗品は各自ご用意ください。
- ② FUJIFILM POSTER PRINTER が研究所にあります。ポスター等の作成の際、ご利用ください。幅594mm、長さ30.3Mまで可能です。
- ③ カラーコピーの利用は総合理学研究所（2-105）に設置されている機器をご利用ください。用途に応じてパスワードが必要です。

【お願い】

研究所のコピー機利用に伴う消耗品の紛失が目立つようになり、特にステープラー等の準備が研究所で対応困難な状況です。コピー機利用の学生には各自用意、対応のお願いをしてください。

— ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ — ☆ —

学会の研究会参加で盛岡にいつきました。岩手県立大学のソフトウェア情報学部所属で現在学部長職にある菅原光政教授が、産地直売所への農産物トレーサビリティで非常に興味のある事例報告をしてくれました。研究室の学部生や院生も20名近く共同で研究作業に参加していました。思わずホッと光景に出会いました。土屋でも何とかしなくちゃ（E）。

小満

